

42348

教科書文庫

4
815
42-1937
2000.0 24157

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

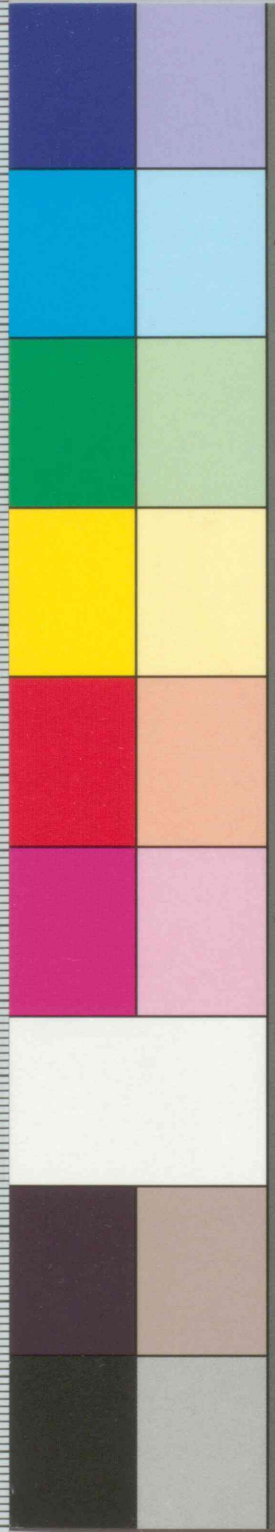
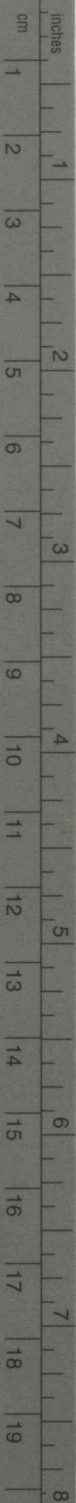


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
815
42-1937
2000024157

八波則吉著

現代女子日本文法

初學年用



阪大 京東

行發社進英



日九十二月十年二十和昭
濟定檢省部文
用科語國・校學女等高

教科書文庫
4
815
42-1937
2000024157

資料室

395.9
Y220

現代女子日本文法
八波則吉著

東京
大阪
英進社發行

広島大学図書

2000024157



廣島大學
圖書印



一 本書は昭和十二年三月二十七日改正の教授要目に準據し、高等女學校初學年用の國文法教科書として、口語法の大要を授ける爲に編纂したものである。

一 「規則を少くして練習を多くせよ。」といふ文法教授の原則に基き、説明を簡潔にして練習題を豊富にした。

一 既習事項との聯繫に注意し、練習題は主として尋常小學國語讀本中から採擇した。

一 講讀作文との聯絡を密ならしめ、上級用との教材の排列をも考慮した。

代現
女子日本文法
初學年用

目次

總說	一
品詞	
第一章 名詞	三
第二章 數詞	五
第三章 代名詞	七
第四章 動詞	一〇

五 十 音 圖

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	
行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	
わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	ア段
る	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い	イ段
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ウ段
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	エ段
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	オ段

第五章	形容詞	三
第六章	助動詞	一五
第七章	副詞	一七
第八章	接續詞	二三
第九章	助詞	二四
第十章	感動詞	二六

用言の活用

第一章	動詞の活用形	三〇
第二章	動詞の活用の種類	三四
一	正格活用	三四

二	變格活用	四
第三章	形容詞の活用	四
第四章	音便	五
第五章	助動詞の種類と活用	五

文

第一章	文の成分	七
第二章	文の種類	七

附表

一	動詞・形容詞の活用表
二	助動詞の活用表



現代
女子日本文法 初學年用

總 說

一 春は楽しい。

二 櫻は日本の國花なり。

右の例のやうに、それ／＼一つのまとまつた考をいひあらはしたものを文といふ。

文には、(一)のやうに、主として日常の談話に用ひるものと、(二)のやうに文章にばかり用ひるものとの二種がある。前者を口語といひ、後者を文語といふ。本書では専ら口語について説く。

文は、傍線はうせんを施したやうに、幾つかの言葉から組立てられてゐるも

口語
文語

文

單語

のである。文を組立てるひとつの言葉を單語といふ。單語はその意味や働きや形によつて、左の十種にわけらる。

品詞

名詞 數詞 代名詞 動詞 形容詞 助動詞 副詞
接續詞 助詞 感動詞
これらを、それ／＼品詞と名づける。

練習

次の文を單語に分けなさい。

〔例〕青葉の上に、日が氣持よく照る。

- 一 雲が切れる、かもめが飛ぶ。
- 二 漁師の子供達が、あちらこちらで貝を拾ふ。
- 三 誰か川上の方で、さきほどから笛を吹いてゐる。

品 詞

第 一 章 名 詞

名詞

右の例の傍線を施した言葉のやうに、物事の名をあらはす單語を名詞といふ。

練習

次の文から名詞を選び出しなさい。

- 一 博多の沖は、見渡すかぎり、元から押寄せた船でおほはれた。
- 二 崩えて明かるい若草に、しと／＼、細い雨が降る。雨はこぬかか、絲のやう。

〔例〕今は櫻やなたねの花ざかりです。

一 やぶかうじの赤い實に並んで、春蘭のつぼみのふくらんだのも見える。

二 日本武尊は相模の國から、船で上總の國へお向かひになつた。

三 役場の前から横道へはいりますと、材木をたくさんつんだ荷馬車が來ました。

四 青緑・紅紫、目のさめるやうに美しい魚の群が、珊瑚の林や海藻の間をぬつて泳いで行く。

五 大阪驛からほど南へ、御堂筋といふ大通を進むと、やがて大江橋を渡つて中之島といふ所へ來ます。

六 大都會では、廣い通は、中央が車道といつて、電車や自動車を通る所になつて居り、其の兩がはに、歩道といつて、人の通る所がある。

七 あたまを雲の上に出し、四方の山を見おろして、かみなりさまを下に聞く、富士は日本一の山。

八 むらくもはらつて世界を照らす、日の大神の大御姿を、うつして仰ぐ日の丸の旗。あゝ嚴かな日の丸の旗。

第二章 數詞

一 一寸の蟲にも五分の魂。

二 十で神童、十五で才子、二十すぎてはたゞの人。

三 左に折れて第二の鳥居を過ぎ、又右に折れて第三の鳥居の前に出る。

四 五時間目の授業がはじまつた。

右の例の傍線を施した言葉のうち、(一)(二)はいくつと數量をあらはし、(三)(四)はいくつめと順序をあらはしてゐる。かやうに物事の數量や順序をあらはす單語を數詞といふ。

數詞

練習

次の文から數詞を選び出しなさい。

〔例〕光子は五百人中三番の成績で入學しました。

- 一 これに具足一領、長刀一ふり、又あれには馬を一匹つないでもつて、をります。
- 二 五十人は三隊になれ。中央の隊が十八人、左右の隊が各々十六人、槍のほさを並べて一度に進むのだ。
- 三 アメリカ合衆國第十六代の大統領リンカーンは、今から百年餘り前、ケンタッキー州の片田舎の貧しい家に生れた。
- 四 或山寺で、四人の僧が一室に閉ぢこもつて、七日間の無言の行を始めた。小僧一人だけ自由に入出させて、いろ／＼の用を足させた。
- 五 十月二十五日は青年團の道ぶしんの日であつた。團員は午前七

第三章 代名詞

一 「それは私の着物でございます。」「いや、これは私が今ここ

- 六 時八幡神社の境内に集つた。總員三十二人が四組に分れて、それぞれ仕事の持場に向つた。
ルーブル博物館も一覽しましたが、りつばな繪畫彫刻の多いことは恐らく世界第一であらうと思ひました。又エツフェル塔にも登つて見ました。此の塔は世界最高の建物で、高さが三百メートルもあるさうです。
- 七 太陽のさしわたしは三十五萬四千里、即ち地球の百九倍餘りに當り、其の容積は地球の百三十萬倍に當つてゐる。溫度は表面で約六千度、内部に入るに隨つて益々高い。光の強さに至つては非常なもので、之を燭光でいへば一三の下に零を二十六もつけて表さねばならぬ。

代名詞
體言

「でひろつたのです。」
 二 叔父さん、ここはどこですか。
 三 あちらでもこちらでも、さえたはさみの音がちよきんちよきんと聞える。
 四 そちらへ行くのは誰か。お前は彼を知つてゐるか。
 右の例の傍線を施した言葉のうち、私、お前、彼、誰は人の名の代りに、それ、これは事物の名の代りに、ここ、ここは場所の名の代りに、あちら、こちら、そちらは方角の名の代りに用ひられてゐる。かやうに人・事物・場所・方角の名の代りに用ひられる單語を代名詞といふ。名詞・數詞・代名詞を總稱して體言といふ。

練習

次の文から代名詞を選び出しなさい。

〔例〕 此處は何處だらう。一體わしは今までどうしてゐたのだらう。

- 一 「あなたはどなたでいらつしやいます。」「われは天皇の皇子やまとをぐな。」
- 二 おとよ、大きくなつたなあ。わしはあちらに居てもお前の事ばかり心配してゐた。
- 三 そのつらさは、とてもお前達にわかるものではない。
- 四 彼は急いで家に歸つた。其の夜はまんじりともせず机に向つて、かの曲を書きあげた。
- 五 海岸には所々に燈臺がありますから、それを見ると、あれは何所だといふことが分ります。
- 六 弟はあちらこちら曆をくつてゐるうち、ふと「八十八夜」の文字に目をとめて、「こゝに『八十八夜』とありますが、これは何ですか。」とたづねると、父は「それは立春から數へると八十八日目、稻をはじめ

大ていの物の種をまく目安になる日だ。」と教へた。私はこの話を聞いて、珍しく思つた。

七 我々が談話をなすに當つては、誰に話すか、何を話すか、何處で話すかを注意せねばならぬ。

第四章 動 詞

一 笑ふ門には福來る。

二 峠には茶店はあるが、客は一人も居ない。

右の例の傍線を施した言葉のうち、笑ふ來るは物事の動作をあらはし、ある居は物事の存在をあらはす。かやうに物事の動作や存在をあらはす單語を動詞といふ。

動詞

冊子
ある
たらぬ

練習

次の文から動詞を選び出しなさい。

- 一 吹く風はさわやかに、ふむ砂はさくくと鳴る。
- 二 恩を知らぬ者は犬にも劣る。
- 三 舟は風にゆられながら、土橋の方へながれて行く。
- 四 瀧川から根室行の汽車に乗ると、約五時間後に石狩と十勝の境にある狩勝の峠にかかる。
- 五 ある切る、掘る、運ぶ、誰も彼も一心不乱に働く。
- 六 見る物聞く物唯々驚く外はありません。
- 七 沖を走るは丸屋の船か、丸にやの字の帆が見える。
- 八 甲板洗がすむと、顔洗へ。「煙草ぼん出せ」の令が下る。そこで始

- 八 動 乗員は顔を洗ふ。
- 九 名 身をすてて、皇國のために、まつしくら進む兵士の 動 するしの 名 軍旗しるしの軍旗。
- 一〇 名 軍旗しるしの軍旗。
- 一一 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 一二 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 一三 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 一四 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 一五 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 一六 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 一七 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 一八 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 一九 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 二〇 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 二一 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 二二 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 二三 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 二四 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 二五 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 二六 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 二七 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 二八 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 二九 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 三〇 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 三一 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 三二 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 三三 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 三四 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 三五 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 三六 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 三七 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 三八 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 三九 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 四〇 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 四一 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 四二 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 四三 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 四四 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 四五 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 四六 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 四七 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 四八 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 四九 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 五〇 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 五一 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 五二 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 五三 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 五四 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 五五 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 五六 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 五七 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 五八 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 五九 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 六〇 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 六一 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 六二 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 六三 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 六四 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 六五 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 六六 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 六七 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 六八 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 六九 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 七〇 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 七一 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 七二 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 七三 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 七四 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 七五 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 七六 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 七七 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 七八 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 七九 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 八〇 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 八一 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 八二 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 八三 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 八四 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 八五 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 八六 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 八七 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 八八 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 八九 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 九〇 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 九一 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 九二 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 九三 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 九四 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 九五 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 九六 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 九七 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 九八 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 九九 名 旗ほまれ 動 の軍旗。
- 一〇〇 名 旗ほまれ 動 の軍旗。

第五章 形容詞

- 一 暖い晩だ。
 - 二 山畑に稗ひえの作つてあるのも珍しく、谷間に白い山ゆりの花のまばらに見えるのも面白い。
 - 三 無い袖は振れぬ。
- 右の例の傍線を施した言葉は、いづれも物事の有様をあらはして

形動代名 体言

形容詞

さびげを
付けた名
詞とす

ある。かやうに物事の有様をあらはす言葉で、いひ切る場合に
となる單語を形容詞といふ。

練習

次の文から形容詞を選び出しなさい。

- 一 形 若々しい梢の色は強い日光を浴びてゐる。
- 二 名 ひよどりは元氣な鳥だ。こんな寒い日にも、朝早くから、高い木の
動 上をとびまはつて鳴いてゐる。
- 三 名 湖畔の家、道路を走る自動車、すべてが玩具のやうに小さく、玩具の
形 やうに美しい。
- 四 名 天の橋立は海中へ突き出た細長い洲で、長さは一里、はらはら四五十
動 間。其の洲の白い砂の上に、青い松が一面に立つてゐて、長い橋の
動 やうに見えます。

四 坂町を上つて小高い所に立つときつと港の景色が、高い建物の間や美しい町の上などに、油畫のやうに見えます。

五 寶石をちりばめたやうなかはいゝ目、紅をさしたかと思はれるやさしいくちばし美しい羽毛に包まれた圓い胸鳩は見るからに愛らしいものである。

六 昭和七年の夏、ロスアンゼルスで開かれたオリンピック大會に、日本の選手がめざましい活躍をしたことは、今も町の嬉しい話題になつてゐます。

七 封書には、いろ／＼こみ入つた事が書いてあります。おめでたい事やたのしき／＼な事が書いてありますと、私もうれしいと思ひますが、悲しい事や苦しき／＼な事が書いてありますと、もらひ泣きをいたします。

八 「ねん／＼ころりよ、おころりよ、ぼうやは好い子だ、ねんねしな。」 誰でも、幼い時母や祖母にだかれて、かうした歌を聞きながら、快いゆ

ねん／＼

助動詞
である

助動詞
である

助動詞

第六章 助動詞

- 一 前方に湖が見え出した。
 - 二 雨がまだ止まない。
 - 三 起きようと思へば起きられる。
 - 四 これだけはお目にかけたいと思ひます。
 - 五 大阪は日本第一の工業都市である(だ)です。
 - 六 月は盆のやうだ。
- 右の例の傍線を施した言葉のやうに、助動詞は稀に體言やのなど

め路にはいつたことを思ひ出すであらう。此のやさしい歌に歌はれてゐる言葉こそ、我がなつかしい國語である。

の下に附くこともある。

七 とてもうちにじつとしてゐられない。

八 今夜は北斗七星がはつきり見られました。

右の例の傍線を施したものの、やうに、助動詞は更に他の助動詞の下に附いていくつも重なることがある。

動詞・形容詞・助動詞を總稱して用言といふ。

用言

練習

次の文から助動詞を選び出しなさい。

- 一 我々は、國語によつて話したり、考へたり、物事を學んだりして、日本
- 二 私がかね／＼古事記を研究したいと思つてをります。
- 三 空は水のやうにすみきつて、雲一つありません。
- 四 此の愛らしい小鳥が、いろ／＼の困難をかかして、遠い處まで使者の役目を務めると聞いては、誰でも驚かない者はあるまい。
- 五 號令につれて、つり床は正しく一定の場所に納められる。すべての窓や出入口は開かれる。
- 六 世界第一といはれるニューヨークは、全く高層建築の大都市です。
- 七 大空にそ／＼り立つ二十階三十階の大建築、對岸オランダへ渡す六千九百米のすばらしい長橋、さういふものを見ただけで、あゝアメリカだなど、つく／＼感じさせられました。

- 一 夏休には、私もきつと行く。

第七章 副詞

- 二 時間がまだ早い。
- 三 もう八重櫻も散り、行く春を惜しむ心がそろ／＼胸にせまる。

右の例のきつとまだもうそろ／＼のやうに、動詞・形容詞の意味を限定する單語を副詞といふ。

副詞は意味を限定する言葉のすぐ上に來るのが普通であるが、時としては右の例のもうそろ／＼のやうに他の語句を隔てて限定することもある。

- 四 船はいま靜かに歸る。

- 五 まだなか／＼寒い。

右の例の歸る・寒いのやうに二つ以上の副詞によつて限定せられることがある。

- 六 少し斜にすわる。

- 七 もつと靜かに歩め。

右の例の少しもつとはそれ／＼副詞の斜に靜かにの意味を限定してゐて、やはり副詞である。

- 八 汽車はおよそ三十分毎に、電車はおよそ十分毎に發着する。

- 九 名残はなか／＼盡きない。

- 一〇 畢竟平素の注意が足らないのだ。

右の例の(八)のおよそは下の體言の意味を限定し、(九)のなか／＼は下の語句の意味を限定し、(一〇)の畢竟は下の文の意味を限定してゐて、やはり副詞である。

以上述べたやうに、おもに動詞・形容詞の意味を限定し、時としては他の副詞・體言・語句・文の意味を限定する單語を副詞といふ。

練習

次の文から副詞を選び出し、どの語の意味を限定してゐるかをいひなさい。

〔例〕彼は頗る熱心に其の職務に従事した。

- 一 人はいよ／＼勇み馬はます／＼はやる。
- 二 空飛ぶ鳥を見て、自分もあゝいふ風に飛んでみたいと思ひ、いろいろ工夫した人は、かなり古からあつたやうです。
- 三 朝晩めつきり寒くなつた。高い山はもう雪だらう。
- 四 枯れかかつて一面に黄色になつたじやが、いも畑を、午後の日がかん／＼と照してゐる。
- 五 正成は實にえらい人である。
- 六 汽車は野を過ぎ山を越えて進む。北上川はまだをり／＼見えるが、いよ／＼せまくなつて、とう／＼谷川になつてしまつた。

- 七 珍しい植物はこの外にもまだたくさんあります。これ等の植物が茂つてゐる様子は實に見事です。海の中もなか／＼きれいです。
- 八 あなたはまだお若いから、しつかり努力なさいたら、きつと此の研究を大成することが出来ませう。
- 九 上海は交通上重要な位置を占めてゐて、外國との貿易ばかりでなく、支那の各地との取引にもきはめて便利であるから、港内には常に數百隻の船が集つてゐて、頗る壯觀である。
- 一〇 晴れた夜、空を仰ぐと、たくさん星が、まるで寶石をちりばめたやうに美しく輝いてゐます。ちよつと見たところでは、ほとんど無數と見えるこれらの星にも、名前や番號があり、位置もきまつてゐるのです。が、だゞぼんやり見てゐるだけでは、一體どれがどれなのか、さつぱり見當が付きません。

第八章 接 續 詞

接續詞

一 山また山を分けて行く。
 二 お前は行くか、それとも歸るか。
 三 おほめにあづかつて恐れ入る。しかし部下の者は、最後までベルギーの名譽をけがさなかつたつもりである。
 右の例の傍線を施した言葉のやうに、その上下の語句や文を結びつける單語を接續詞といふ。

練習

(一) 次の文から接續詞を選び出しなさい。

〔例〕 有難うございます。しかし^接誠に粗末なピアノで。そ^接

れに樂譜もございませんが。

- 一 動物及び植物を生物といふ。
- 二 答案はペン又は鉛筆で書きなさい。
- 三 日光が店一ぱいにさし込んで来た。するとねちが其の光線を受けてびかりと光つた。
- 四 一體最も理想的な燈火は太陽の光のやうに明るくて、しかもほたるの光のやうに熱をとまはないものであります。
- 五 電気は今やあらゆる方面に利用されてゐます。けれども其の利用は決してこれで盡きたものではありません。
- 六 國家の存立を危くし、國民の生活をおびやかすやうな危機は絶無であり、國內はおほむね平和であつた。随つて國民は國の誇を傷つけられたことがなく、又其の誇を永久に持續しようとする心掛も出来た。

(二) 次の接續詞を用ひて短文を作りなさい。

〔例〕 それに

雨が降る、それに風が吹く。

或は 且 しかしながら さうすると

だから ところが 尤も

第九章 助詞

一 桃の花は三月の末頃咲出す。

二 明日雨が降れば延ばさう。

三 浪が荒くても出帆しよう。

四 とうとう面會しないで歸つた。

右の例の傍線を施した言葉は、體言や用言の下に添うて他の語句との關係をあらはしてゐる。

五 けさこそいさんよりさきに起きてみよう。

六 お前は誰か。

助詞
一
お前は誰か

七 親の恩を忘れるな。

八 まあ、いゝ月だねえ。

てにおは

助詞

右の例の傍線を施した言葉は、種々の語の下に添うて意味を強め、または疑問・禁止・感歎などの意味をあらはしてゐる。

かやうに種々の語の下に添うて他の語句との關係をあらはし、またはある意味を添へる單語を助詞といふ。

九 旅行には行かない。

一〇 國語こそは、國民の魂の宿る所である。

右の例の傍線を施したものゝやうに、助詞も重ねて用ひることがある。

練習

次の文から助詞を選び出しなさい。

よ、から、ま、の、は、は、と、も、す、ら、も、

〔例〕 やれ打つな、はへが手をする足をする。

一 やせ蛙まけるな一茶これにあり。

二 秋は蟲の聲から始る。

三 出勤を急ぐ人たちが通る、勢よくステッキを振りく、靴音を立てて。

四 四國九州の武士は博多の濱にあつまつた。元の兵は一人も上陸させぬといふ意氣ごみで濱べに石垣をきづいて守つた。

五 打返す磯波にまき込まれたかと思へば、忽ち大波にゆり上げゆり下げられ、沖へ沖へとつき進む。

六 國語を忘れた國民は國民でないときへいはれてゐる。

第十章 感動詞

一 あゝ面白かつた。おや、北斗七星が半分杉林にかくれて

感動詞

(一) 次の文から感動詞を選び出しなさい。

練習

しまつた。

二 やあ、正綱、十四歳の時が二度あるか。

三 「いや、きつと頼まれたであらう。」 「いゝえ、頼まれたのではございません。」

四 これ、北八、お前、これをついでくれ。

右の例の傍線を施した言葉のやうに、感情の動く時や、呼びかけ又は應答の時に發する單語を感動詞といふ。

〔例〕 感 まあ、お立派に出來ましたね。 感 「いや、お恥かしうござい

一 名 助 動 詞 助 動 詞 助 動 詞 助 動 詞
あれ、松蟲が鳴いてゐる。

二 さらもう一息だぞ。進め。助動詞

三 あらてふてふが五郎さんの舟にとまりました。ほうらもうぢき助動詞

四 に勝負だ。助動詞

五 それもう目がくれるぞ。一本杉のうしろへお日様がおいりに助動詞

六 一つ御馳走になりませう。私にはもうとてもひけま

七 やあ皆さん御苦勞ですわね。今通つて見て來ましたが大層立派に助動詞

八 空はいよくすみ月はいよく明かるい。

(二)

次の文を各單語に分けて、それ／＼その品詞の名を書きなさい。

一 [例] 鏡のやうな月が森の上に美しい姿を現した。助動詞

二 空はいよくすみ月はいよく明かるい。

二 一番末の弟が、お供物のおだんごをたべたいと言出した。助動詞

三 さて、虹は美しい。赤黄みどりやむらさきと七つの色をな

四 靖國神社の青銅の鳥居は、實に大きい。恐らく、青銅の鳥居では日

五 本一だ。それから此の境内にある遊就館には昔からの武器や戦

六 争に關係のあるいろ／＼の物が陳べてある。

用言の活用

第一章 動詞の活用形

國の爲に死なう。

國の爲に死にたい。

國の爲に死ぬ。

國の爲に死ぬ覺悟だ。

國の爲に死ぬば本望だ。

國の爲に死ぬ。

活用

右の例のやうに「死ぬ」といふ動詞は、その語形がいろ／＼に變化する。かやうに語形の變化することを活用といひ、活用のおの／＼

活用形

語幹

語尾

の形を活用形といふ。

活用する一語のうちで、變化しない部分を語幹といひ、變化する部分を語尾といふ。右の例の語幹は「死」で、語尾は「な」「ぬ」「ね」「ね」である。

動詞の活用は五十音圖の或一行のうちに限つて行はれるのが原則で、その活用形には次の六種がある。

未然形

① 未然形 右の例の「死なは」「死なう」のやうに、事がまだ成立たない意味をあらはす形であるから、これを未然形といふ。

連用形

② 連用形 「死には」「死にたい」又は「死に絶える」のやうに、用言に連なる形であるから、これを連用形といふ。

終止形

③ 終止形 「死ぬは」文の意味をいひ切る場合に用ひられる形であるから、これを終止形といふ。

連體形

④ 連體形 「死ぬは」「死ぬ覺悟」のやうに、體言に連なる場合に用ひら

假定形

命令形

動詞の活用形の見分け方

れる形であるから、これを連體形といふ。

⑤ 假定形 「國の爲に死ねば本望だ」は、假定の意味をあらはす形であるから、これを假定形といふ。

⑥ 命令形 死ねは、命令の意味をあらはす形であるから、これを命令形といふ。

動詞の六種の活用形を見分けるのには、次のやうにするのが最も便利である。

う	に連なる活用形……………未然形	死なう
よう	に連なる活用形……………連用形	死にたい
たい	に連なる活用形……………連用形	死にたい
……	いひ切る活用形……………終止形	死ぬ
とき	に連なる活用形……………連體形	死ぬとき
ば	に連なる活用形……………假定形	死ねば

四段活用の命令形はよ・ろに連ならない。「死ぬ」は四段活用である(後でいふ)からよ・ろなしで命令形となる。

よ
ろ } に連なる活用形……………命令形 死ね
なほ、活用形の名稱は、その用法の一部によつて便宜上附けたものであるから、この名稱がすべての用法を盡くしてゐるものと考へてはならない。

練習

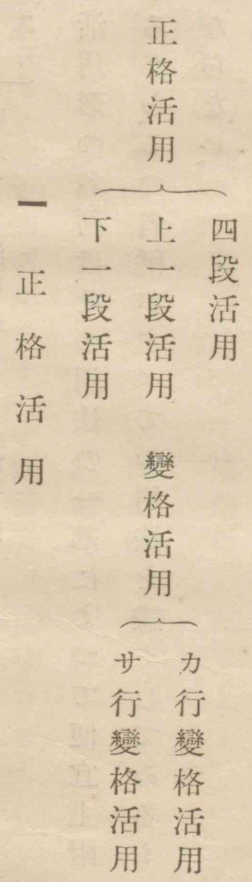
次の文から動詞を選び出し、どの活用形が用ひられてゐるかを答へなさい。

- 【例】朝から麥を打つ音が方々で聞える。
- 一 私の學校に、大きな杉の木が一本ある。高さはどのくらゐあらうか。
- 二 機上から下界をのぞくと、森、人家、道路、島さういふものが模型圖の

- 一 やうにきちんとしてゐるの連用が見える終止。
- 二 我が國の古代精神を知りたいといふ希望から、古事記を研究しよ未然形うと考へた。
- 三 猫が肥えれば連用鯉節がやせる。
- 四 雀の子、そのけ命令、そのけ、御馬が通る終止。

第二章 動詞の活用の種類

動詞の活用には次の五種類がある。



四段活用

四段活用

- 花も咲かう。未然形
- 花が咲きました。連用形
- 花が咲く。終止形
- 花の咲く頃となつた。連體形
- 花が咲けば見に行かう。假定形
- 花よ、咲け。命令形

語 幹		語		尾	
		未然形	連用形		
咲	ア 段	か			
	イ 段	き			
	ウ 段	く			
	エ 段	け			
	段	け			

右の例のやうに咲くといふ動詞は五十音圖のアイウエの四段に活用するから、これを四段活用の動詞といふ。

四段活用の見分け方

○ 咲くはカ行の四段に活用するから、カ行四段活用といひ、買ふはハ行の四段に活用するから、ハ行四段活用といふ。その他のものもこれから推して考へることが出来る。
動詞が四段活用であるかどうかを見分けるには、その動詞にない又はぬを添へて見て、その上に來る語尾がア段であれば、その動詞は四段活用である。

練習

(一) 次の動詞の活用を述べなさい。

遊	打	幹
ば	た	未
び	ち	用
ぶ	つ	終
ぶ	つ	體
べ	て	假
べ	て	命
ハ四	タ四	

〔例〕 打つ 遊ぶ

讀
めめもま

上一段活用

攻
めめもま

(二) 次の文から四段活用の動詞を選び出し、その活用形を述べなさい。

貸す 書く 走る 歩む 買ふ 放つ

〔例〕 汽車は動き出した。 山を分け、川を傳ひながら上ると、

残雪がだんく深くなる。

- 一 何時の間にか機體が滑り出して、ぐんぐん速力が加はる。
- 二 道路が十文字に交る。電車が走る。自動車が飛ぶ。人影が動く。
- 三 今年伐るはずのは、おとうさんの子供の時植ゑたのだといふが、もう幹のまはりの三尺もあるものが大分見える。
- 四 るり色の水に浮ぶルソー島湖畔に連なる緑樹白壁、はるかに紺青の空にそびえて雪をいたゞくアルプの連峯。久しく單調平凡な景色にあきてゐた私には、如何にも心地よく眺められます。

上一段活用

競技を見よう。

未然形

競技を見た。
競技を見る。
競技を見る人が多い。
競技を見れば面白い。
競技を見よ。

連用形
終止形
連體形
假定形
命令形

又

朝早く起きよう。
朝早く起きます。
朝早く起きる。
朝早く起きる人には幸がある。
朝早く起きれば快い。
朝早く起きよ。

未然形
連用形
終止形
連體形
假定形
命令形

命令形の見よ。
起きよは見ろ。
起きろともいふ。

上一段活用の見分け方

	語幹					
	(見)	未然形	連用形	終止形	連體形	尾
起	起	き	き	きる	きる	きれ
	み	み	みる	みる	みれ	みよ
		イ				
		段				

右の例のやうに、見る、起きるといふ動詞は五十音圖のイの一段だけに活用するから、これを上一段活用の動詞といふ。動詞の活用が上一段であるかどうかを見分けるには、その動詞にない又はぬを添へて見て、その上に來る語尾がイ段であれば、その動詞は上一段活用である。

練習

次の動詞の活用を述べなさい。

〔例〕着る 老いる

老	(着)	幹
い	き	未
い	き	用
いる	きる	終
いる	きる	體
いれ	きれ	假
いよ	きよ	命
	カ上一	
	ヤ上一	

射る 率ゐる 過ぎる 強ひる 盡きる 延びる
 悔いる

下一段活用

㊦ 下一段活用

ボールを蹴よう。
 ボールを蹴飛ばす。
 ボールを蹴る。
 ボールを蹴る子供がある。

未然形
 連用形
 終止形
 連體形

又

ボールを蹴れば高く飛ぶ。
 ボールを蹴よ。

假定形
 命令形

質問を受けよう。
 質問を受けた。
 質問を受ける。
 質問を受ける事が多い。
 質問を受ければすぐ答へよ。
 質問を受けよ。

未然形
 連用形
 終止形
 連體形
 假定形
 命令形

命令形の蹴よ。
 受けよは蹴ろ。
 受けろともいふ。

語幹	語	尾
(蹴)	未然形 連用形 終止形 連體形 假定形 命令形	け け ける ける けれ けよ

受	け	ける	ける	けれ	けよ
	エ			段	

下一段活用の見分け方

右の例のやうに、蹴る、受けるといふ動詞は五十音圖のエの一段だけに活用するから、これを下一段活用の動詞といふ。動詞の活用が下一段であるかどうかを見分けるには、その動詞にない又はぬを添へて見て、その上に來る語尾がエ段であれば、その動詞は下一段活用である。

練習

(一) 次の動詞の活用を述べなさい。

〔例〕 得る 數へる

幹	未	用	終	體	假	命
(得)	え	え	える	える	えれ	えよ
數	へ	へ	へる	へる	へれ	へよ
						ア下一
						ハ下一

甘える 任せる 捨てる 改める 勝れる 植ゑる。

(二) 次の文から上一段活用と下一段活用の動詞を選び出し、その活用を述べなさい。

- 〔例〕 一命を捨てて君恩に報いよ。
タ下一、連用 ヤ上一、命令
- 一 昔の武士は、たとひ飢ゑて死ぬとも、二君に仕へることを恥ぢた。
シト連体
- 二 荒海を見慣れた眼には、對岸を隣國と心得てゐるかも知れぬ。
ア下連用、連体
- 三 「人は火を用ひる動物。」といふやうに、火を使ふのは人類ばかりで、他の動物には見られない。
ハ上連体
- 四 垣根も倒れば、しをり戸も外れる。まして稲田は大波が打つ。
ラ上終

カ行變格活用

○カ行變格活用

二 變格活用

早く來ない。
 早く來た。
 早く來る。
 早く來る人もある。
 早く來ればよいのに。
 早く來い。

未然形
 連用形
 終止形
 連體形
 假定形
 命令形

		語幹			
		(來)			
オ段	コ	未然形	イ段	キ	連用形
イ段		終止形	ウ	くる	連體形
		假定形	段	くれ	命令形
		命令形	オ段	こい	

サ行變格活用

○サ行變格活用

右の例の來るといふ動詞は、こ・き・くる・くる・くれ・こいと五十音圖のイ・ウ・オの三段にわたつて活用する。これをカ行變格活用の動詞といふ。

カ行變格活用に屬する動詞は來るの一語だけである。

勉強をせぬ。
 勉強をしない。

未然形

勉強をし始めた。

連用形

勉強をする。

終止形

勉強をする人は成功する。

連體形

勉強をすれば合格するだらう。

假定形

勉強をせよ。

命令形

命令形のせよ
はしるともい
ふ。

語幹		語		尾	
	(爲)	未然形	連用形	終止形	連體形
エ段	しせ	イ段	しけ	ウ	する
				エ段	すれ
				エ段	せよ

右の例の爲るといふ動詞は、**せししするするすれせよ**と五十音圖の**イ・ウ・エ**の三段にわたつて活用する。これを**サ行變格活用**の動詞といふ。

サ行變格活用に屬する動詞は爲るの一語だけである。

勉強する 論ずる 全くする 正しくする 詳にする

恣にする

右の例のやうに爲るは名詞や形容詞や副詞と結びついて、やはりサ行變格活用の動詞となることが多い。

す
い

か
か
か
か
か
か
よ
れ
る
る

練習

(一) 次の文から動詞を選び出し、その活用形を述べなさい。

【例】 夕食後に日記をつけてゐると、私を呼ぶ聲がする。

- 一 ロンドンの市街を見物して、私の特に感心したのは、市民が交通道徳を重んずることです。
- 二 手や足の關節を曲げたり延ばしたりして、出發の號令を待つ。
- 三 其の後宣長は絶えず文通して、眞淵の教を受け、師弟の關係は日一日と親密の度を加へた。
- 四 さをの先の扇を射よといふのでせう。
- 五 人は生活上の必要から發火法を工夫し、燃料を研究し、熱と火とをあらゆる方面に利用することを考へて來た。
- 六 山野に生ずる草木の中には、藥用にするものが多くありますが、其

の中貴重なもの、一つは朝鮮人蔘です。
 或日炭を焼く男が太郎のうちへ来てゐる。のはたでいろくの話をした。

(二) 次に並べた動詞の活用を述べなさい。

例
 絶える
 堪へる

堪	絶	幹
へ	え	未
へ	え	用
へる	える	終
へる	える	體
へれ	えれ	假
へよ	えよ	命
ハ下一	ヤ下一	

爲る 爲す

居る 居る

来る 来る

生きる 生きる

改まる 改める

第三章 形容詞の活用

形容詞の活用にはク活用とシク活用との二種がある。

一 ク活用

- 水が清く流れる。 連用形
- 水が清い。 終止形
- 水の清い流がある。 連體形
- 水が清ければ飲まう。 假定形

二 シク活用

- 風が涼しく吹く。 連用形
- 風が涼しい。 終止形
- 風の涼しい晩だ。 連體形
- 風が涼しければ行かう。 假定形

活用の種類	語幹	語		尾
ク活用	清	連用形	終止形	連體形
シク活用	涼	しく	しい	しい
				しけれ
				けれ

○形容詞には未然形も命令形もない。

○「清く流れる」「涼しく吹く」のやうに形容詞の連用形は多くは副詞の役目をする。

練習

次の文から形容詞を選び出し、その活用形を述べなさい。

- 一 せいが高く目がするどくて、ちよつと見ると、こはいやうですが、至

至

水が清く流れる
水が清く流れる
水が清く流れる

【例】甲板洗はいかにも勇ましく面白いものである。

つて正直で、氣立のやさしい老人です。
どうだ、美しいだらう。此の温室は南を受けてゐる上に、十分熱い湯が通つてゐるから、こんなに早く咲くのだ。一度此の中にはいと、また寒い處へ出るのがいやになるね。
みねからすそにかけての若々しいこずゑの色は、強い日光を浴びて、一面に煙つてゐる。
下刈はいつも土用中にするので、するぶん苦しいが、それでも木が競争するやうにしんを立てて、すくと伸びてゐるのを見ると、非常にうれし。木でも見下されるのがいやなのか、斜面などに植ゑた木は、低い處にあるもの程早く大きくなつて、こずゑの差が段々少くなつて行くのも面白い。

語と語とが連なる時、發音の便宜上或音が他の音に變ることがあ

第四章 音 便

音便

る。これを音便おんびんといふ。

音便にはイ音便ウ音便撥音便促音便の四種がある。

イ音便

①イ音便 きぎがいに變るもの。

聞き。

聞いて

騒ぎ。

騒いで

歌ひ

○右の外、口語で「ござります」「下さります」「を」「ござります」「下さります」と、りがいになることもある。

○イ音便のいをひ又はあと書き誤つてはならぬ。

ウ音便

②ウ音便 ひくがうに變るもの。

歌ひ。

歌うて

歌うた

○ウ音便のうをふと書き誤つてはならぬ。

嬉しく。

嬉しう。存じます。

嬉しう。ございます。

撥音便

③撥音便 みびにが撥ねる音んに變るもの。

読み。

読んで

飛び。

飛んで

死に。

死んで

二四連

讀ん

ハ四連用

十四連用

○撥音便のんをむと書き誤つてはならぬ。

促音便

④促音便 ちひりが促る音つに變るもの。

往しで
去しで

立ち。立つて
立ち。立つた
笑ひ。笑つて
笑ひ。笑つた
歸り。歸つて
歸り。歸つた

○カ行四段活用の「行きて」は促音便にして「行つて」といふ。

練習

(一) 次の文にある音便の種類を述べ、そのもとの音を示しなさい。

- 一 「例」 飛んで火に入る夏の蟲。
ゴムの用途は年を追うて益々廣くなる。
- 二 床の間には、すばらしく大きな鹿の角と三日月の前立との附いた

三 胃がかざつてある。

三 富士川が注いで、其の濁流を遠く海上に押出してゐるのが見られる。真青な繪の具の水に、クリームを流し込んだ美しさだ。

四 日はよく照つてゐて、ふじの山はいつもよりなほきれいに見える。風はしづかで、波も音を立てません。沖の方は霞んで、空と水とが一つになつて見えます。

五 明治元年三月徳川慶喜征討の官軍は諸道より並び進んで、東海道先鋒は品川に、東山道先鋒は板橋に着いた。月の十五日を期して、總攻撃を行ひ、一舉江戸を乗つ取る手はずである。

六 親子三人庭にすゑた打臺の前に並んで、麥を打つてゐる。後には麥の束が山と積んである。それを一束づつ取つては兩手で根本の所をつかんで打臺にばた／＼とたゞきつけると、莖の先についてゐる穂が、敷いてあるむしろの上に面白いやうに飛散る。

七 ようこそお出で下さいました。まことにありがとうございました。

進

(二) 次の文に誤があれば、その理由を述べて正しなさい。

- 〔例〕願うひのウ音便ふてもんない事だと云つて、彼は勇んみの撥音便むで任務い(き)のイ音便に就きひた。
- 一 謹んむで新年のお祝うらなひを申上げます。
 - 二 負うへふた子こに教しよへられて浅瀬を渡る。
 - 三 先生せんせいに就きひて教しよを受うける。
 - 四 何を言いふても聞きひてくれない。
 - 五 朝あさに星ほしを戴をかぶひて出いで、夕ゆふに月つきを踏ふむで歸かへる。
 - 六 轉まむでも笑わらふてばかり難むづかし。

第五章 助動詞の種類と活用

助動詞はその意味によつて、次の十種に分れる。

- 比較 受身 可能 使役 尊敬 時 推量 打消 指定 希望

受身の助動詞

一 受身の助動詞

子が母に叱なられる。
生徒が先生に褒ほめられる。

右の例のれるられるは、いづれも或動作を他から仕向けられる意味をあらはすから、これを受身の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ

行くことが出来る

二 可能の助動詞

汽車でも電車でも行かれる。
この問題には答へられる。

可能の助動詞

使役の助動詞

右の例の**れるられる**は、いづれもそのものの力で或動作をするこの出来る意味をあらはすから、これを**可能の助動詞**といふ。その活用は受身の**れるられる**と同様であるが、ただ命令形がない。

㊦ 使役の助動詞

父が子に繪を習はせる。

主人が下男に木を植ゑさせる。

右の例の**せるさせる**は、いづれも或動作を他のものにさせる意味をあらはすから、これを**使役の助動詞**といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ

サ行下

尊敬の助動詞

㊧ 尊敬の助動詞

先生が海外に赴かれる。

父上は墓參せられる。

右の例の**れるられる**は、いづれも他の動作を敬ふ意味をあらはすから、これを**尊敬の助動詞**といふ。

○「參ります」「申しあげます」の**ます**は、話の相手に對して敬ふ意味をあらはす口語で、その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ

練習

次の文から受身・可能・使役・尊敬の助動詞を選び出なさい。

〔例〕 其の壯觀は**可**とも筆や口では**可**つくされ**ませ**ん。

助動詞は
動詞の
つら

時の助動詞

⑤ 時の助動詞 動作の行はれる時をあらはす助動詞で、過去、未来の二種に分れる。

- 一 助けられるものならば助けてやりたい。
可能連体
- 二 彼等が町人といつて賤しめられたのも其の爲であらう。
受身連用
- 三 見ようと思へば何時でも見られる。
可能終止
- 四 ドイツ兵に發見せられて野戦病院に送られた。
受身終止
- 五 彼岸は七日の間で、其の中に、春は春季皇靈祭、秋は秋季皇靈祭を行はせられる。
受身連用
- 六 暗い箱の中にしまひ込まれてゐた小さな鐵のねちが、不意にピンセツトにはさまれて、明かるい所へ出された。
受身連用
- 七 さて、おしまひに一つ言つて置くことがあります。
尊(終止)
- 八 母は門口まで送られた。いよ／＼俾が出ようとする時、悲しさうに、じつと私の顔を視て「ぢや、お前ねえ、からだを……。」とまではいはれたが、後は續けないで涙を浮べられた。
尊(連用)

(イ)過去の助動詞

(イ)過去の助動詞

花が散つた。
競技會も終つた。

右の例のたは、或動作が今よりも前に起つた意味をあらはすから、これを過去の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
た	たら	たり	た	た	たら	

(ロ)未來の助動詞

(ロ)未來の助動詞

明日は雨が降らう。
間もなく日も暮れよう。

右の例のう・ようは、或動作が今よりも後に起る意味をあらはすから、これを未來の助動詞といふ。う・ようは活用しない。

た、か、
四段活用につく
上一段 下一段

○ようをやうと混同してはならぬ。
人に笑はれないやうに書いて見よう。
のやうは様の字音で、ようは未来の助動詞である。

練習

未来の助動詞の時には、ようである。
様がある時は、やうである

次の文から時の助動詞を選び出しなさい。

- 〔例〕 このことだけは覚えて置かうと思つた。
 一 船長は外国から持歸つた寫真帳を學校に寄附していつた。
 二 突如として眼前に展開せられた風景は雄大といはうか豪壯といはうか、實に北海道第一の壯觀である。
 三 役場のひけないうちに行つて來よう。
 四 この道は遠いやうだから、あの道を行かう。

推量の助動詞

六 推量の助動詞

山の櫻は美しからう。
頂なら海も見えよう。
霰が降るらしい。

右の例のうようらしいは、いづれも物事を推し量つていふ意味をあらはすから、これを推量の助動詞といふ。うようは活用しないが、らしいは次のやうに活用する。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
らしい		らしく	らしい	らしい		

七 打消の助動詞

打消の助動詞

風が止まぬ。
風が止まない。
これはたゞ事であるまい。

右の例のぬないまいはいづれも或動作を打消す意味をあらはすから、これを打消の助動詞といふ。まいは活用しない。ぬないの活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
ぬ		ず	ぬ	ぬ	ね	
ない		なく	ない	ない	なけれ	

○この中、まいは推し量つて打消す意味をあらはす助動詞である。

○サ行變格活用の動詞がぬないにつき、く場合は、

勉強をせぬ。

勉強をしない。

とするが正しい。

○次の例のぬないは助動詞ではなくて、形容詞である。

今日は風がない。

練習

次の文から推量の助動詞と打消の助動詞とを選び出しなさい。

〔例〕人はなぜ鳥類を研究しないのであらうと不思議に思

ふやうになつた。

一 海藻は花は咲かない。根のやうな所も、陸上の植物の様に養分を

吸収するためのものではない。

二 からのすのなかない日はあつても、五一ぢいさんがうたはない日は

ない。

三 よいあんばいだ。此のやうなら、今日は大したことはあるまい。

四 工場ではもう仕事ははじまつてゐるらしい。

五 交際の道を知らずむやみに人を信じない者は、思ひもよらぬ誤解

指定の助動詞

⑧ 指定の助動詞

三 を蒙ることがないとも限らない。
 六 もう人にはたよるまい。自分一人で修行をしよう。

東京は日本の首府だ。
 人は萬物の靈長である。

右の例の「だ」「です」であるは、いづれも物事を指し定める意味をあらはすから、これを指定の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
だ	だら	だつ	だ			
です	でせ	でし	です			

希望の助動詞

⑨ 希望の助動詞

明日の試合に勝ちたい。

右の例の「たい」は、或動作を希望する意味をあらはすから、これを希望の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

である	であら	であり	である	である	であれ
-----	-----	-----	-----	-----	-----

比較の助動詞

⑩ 比較の助動詞

人生は夢のやうだ。

右の例の「やうだ」は、物事を比較する意味をあらはすから、これを比較の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
たい		たく	たい	たい	たけれ	

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
やうだ	やうだら	やうだつ	やうだ	やうな	やうなら	

○やうですはやうだよりも鄭重な言ひ方である。
 ○やうだやうですは、
 誰か来るやうだ。
 明日は出来るやうです。
 のやうに推量の意に用ひられることもある。

今日晴れ天気。よい。
 私は、試験をうけやうと思ふ。
 明日はきっと晴れやう。

練習

- 次の文から助動詞を選び出し、その種類を述べなさい。
- 【例】彼はなぜもつと勉強しないのだらう。
 井戸端の柿は、まだ青いが、早く甘くなるだから、もうちぎりに食

下に言ふ
 所がつかうと
 未然にエのよ
 動詞人可ま
 かうてとほる

二 裁判の目的は、決して人を争はせ、又は人を罰することではない。
 此の世を不道理や罪惡の行はれない、平和な、秩序正しい世の中に
 するのが其の目的である。
 三 若い頃から讀書がすきで、將來學問を以て身を立てたいと、一心に
 勉強してゐた。
 四 お知らせしたいことはいろく、ありますが、大分長くなりました。
 から、今日はこれ位にしておきます。
 五 もはや調べさせる暇はないらしい。
 六 火を使用するのは人類ばかりで、他の動物には見られない所であ
 る。
 七 熱や光の作り方や利用の方法は、決してこれで完成したといふわ
 けではあるまい。將來又どんなものが發明されるかも知れない。
 八 何を見ても思出の種とならないものはありません。

文

第一章 文の成分

主語
述語

●主語・述語

鳥が啼く。

花は美しい。

風が吹いてゐますね。助詞

右の例の鳥が花は風がのやうに文の主題となるものを主語といひ啼く美しい吹いてゐますねのやうに主題の動作有様などを述べるものを述語といふ。

このやうに文は主語と述語とが結びついて一つのまとまつた思

想をいひあらはすもので正式の文には必ず主語と述語とが備はつてゐる。

○一つの文に主語も述語も重なることがある。

父も母もたつしやです。

この品は新しくて美しい。

一郎も二郎も勉強し運動する。

●補語

義経が平氏を討つ。

秀吉が關白となる。

影は形に従ふ。

禍は口から起る。

右の例で、義経が討つ「秀吉がなる」「影は従ふ」「禍は起る」といふだけでは、文の意味が完全にならない。平氏を關白と形に口からな

補語

どの語が補はれて、始めてその思想が完全にあらはされる。かやうに述語の意味を補うてその文意を完全にする語を補語といふ。

○一つの文に補語が二つ以上あることもある。

頼朝、幕府を鎌倉に開く。
父は子に名を峰子とつけた。

文の主要成分

主語・述語・補語は文の組立に必要な成分であるから、これを文の主要成分といふ。

修飾語

⑤ 修飾語

美しい花が咲く。

私は面白い文を作った。

この室は大層涼しい。

右の例の美しいは花がを面白いは文をを、大層は涼しいを修飾する。かやうに主語・述語・補語を修飾する語を修飾語といふ。

獨立語

④ 獨立語

○修飾語は幾つも重なつて同じ語を修飾する事があり、又他の修飾語を修飾することもある。

廣い深い湖水が森の中にあります。

飛行機が晴れた静かな空を飛んでゆく。

群衆は東からも西からも集つた。

夕日が非常に美しく輝く。

景色もよし、それに氣候も暖かである。

あゝ、よくかへつて来たね。

花子や、これは何ですか。

會長は、會員がこれを互選する。

右の例の、それに(接續の語)、あゝ(感動の語)、花子や(呼掛の語)、會長は(提

文の補助成分
文の成分の位置

示の語のやうに、文の主要部から獨立するものを獨立語といふ。修飾語・獨立語のやうに、文の主要成分を助けて、文の成立を完全に
するものを文の補助成分といふ。

文の成分は、これを排列するに、ほとゝ一定の順序がある。

春が來た。

子供が父に菓子をやる。

小さい子供達が面白さうに遊んでゐる。

あ、日が出はじめた。

右の例は文の成分が通常的位置にある。しかし、文の意味を強め
又は言葉の調子を整へるために、わざと成分の位置を顛倒するこ
ともあり、また、文を簡潔にし語勢を強めるために、意味の明確を失
はない範圍に於て或成分を省略することもある。

誰ですか、あなたは。
私にも見せて下さい、それを。
それは大變でしたね、實に。
もうだめだ、あ。

これは文の成分を倒置した例である。

(我々は)公園の樹木を愛しませう。

皆さん、こちらへ(おいで下さい)。

意見のある人は(それを)私に述べて下さい。

これは文の或成分を省略した例である。

練習

次の文について、文の主要成分補助成分を指摘しなさい。

- 〔例〕 鏡のやうな月が、高く秋の空にかゝる。
- 一 我等は日本人である。
 - 二 大小無数の島々が各所に散在する。
 - 三 新緑の野は最も私の心をひきつける。
 - 四 心は持あやう氣は取りやう。
 - 五 正直の頭に神宿る。
 - 六 そんな事をあなたは誰から聞いたのですか。
 - 七 福は内鬼は外。

第二章 文の種類

單文

文はその構造の上から、單文・複文・重文の三種に分ける。

一 單文

春が來た。

複文

父母の恩は、山よりも高く海よりも深い。
 釋迦・孔子・キリスト・ソクラテスは世界の四聖である。

右の例のやうに、主語と述語との文法上の關係がたゞ一回だけ成立する文を單文といふ。

二 複文

雨の降る日は陰氣だ。
 所變れば品變る。

右の例のうち、傍線のある部分は、文が他の文の一部分となつたものである。かやうに、文が他の文の一部分となつたものを節といふ。右の例のやうに、文の主要成分を修飾してこれに従屬してゐる一つ以上の節を含む文を複文といふ。複文に於ては主語と述語との文法上の關係が二回以上成立つてゐる。

重文

三 重文

花笑ひ、鳥歌ふ。

垣は崩れ、屋根は漏り、壁は落ち、家は傾いてゐる。

右の例のやうに、二つ以上の對立した節を含む文を重文といふ。重文に於ても主語と述語との文法上の關係が二回以上成立つてゐる。

練習

次の文の種類をいひなさい。

〔例〕 能ある鷹は爪をかくす。(複文)

- 一 東山は月にもよく、又雪にもよい。(重文)
- 二 花の咲く春も近づいた。(複文)
- 三 人々は春の來るのを待つてゐる。

- 四 鳥は空に飛び、魚は水に泳ぐ。
- 五 今學年もやがて終りになります。

現代 女子日本文法 初學年用 終

一 動詞・形容詞の活用表

活 上 一 段											四 段 活 用						活 用 名		動 詞 の 活 用 表		
懲	報	恨	強	落	起	(居)	(射)	(見)	(乾)	(似)	(着)	死	有	歸	讀	問	立	押		聞	語 幹
り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	き	な	ら	ら	ま	は	た	さ	か	未 然 形	語
り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	き	に	り	り	み	ひ	ち	し	き	連 用 形	語
り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	き	ぬ	る	る	む	ふ	つ	す	く	終 止 形	尾
り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	き	ぬ	る	る	む	ふ	つ	す	く	連 體 形	尾
り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	き	ぬ	れ	れ	め	へ	て	せ	け	假 定 形	尾
り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	き	ぬ	れ	れ	め	へ	て	せ	け	命 令 形	尾

シク活用		ク活用	活 用 名	活 下 一 段											活 用 名			
美		善	語 幹	(爲)	(來)	植	晴	榮	攻	堪	兼	捨	寄	受	(得)	(蹴)	語 幹	尾
しく		く	連 用 形	し	こ	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	け	未 然 形	語
しい		い	終 止 形	し	き	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	け	連 用 形	語
しい		い	連 體 形	する	くる	ゑ	れる	える	める	へる	ねる	てる	せる	ける	える	ける	終 止 形	尾
しけれ		けれ	假 定 形	する	くる	ゑ	れる	える	める	へる	ねる	てる	せる	ける	える	ける	連 體 形	尾
しけれ		けれ	命 令 形	すれ	くれ	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	け	假 定 形	尾
				せよ	こい	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	け	命 令 形	尾

二 助動詞の活用表

使 役		可 能		受 身		種 類
れる	させる	せる	られる	れる	られる	本 形
れ	させ	せ	られ	れ	られ	未 然 形
れ	させ	せ	られ	れ	られ	連 用 形
れる	させる	せる	られる	れる	られる	終 止 形
れる	させる	せる	られる	れる	られる	連 體 形
れ	させ	せ	られ	れ	られ	假 定 形
	せよ			れ	れ	命 令 形

打 消		推 量		種 類
だ	まい	ない	ぬ	う
だら			らしい	う
だつ		なく	す	う
だ	まい	ない	ぬ	う
		ない	ぬ	う
		なけれ	ね	

四段活用												活用名		動詞の活用表								
活用名												語幹										
懲	報	恨	強	落	起	(居)	(射)	(見)	(乾)	(似)	(着)	死	有	歸	讀	問	立	押	聞	未然形	語	尾
り	い	み	ひ	ち	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	な	ら	ら	ま	は	た	さ	か	連用形	語	尾
り	い	み	ひ	ち	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	に	り	り	み	ひ	ち	し	き	終止形	語	尾
り	い	み	ひ	ち	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	ぬ	る	る	む	ふ	つ	す	く	連體形	語	尾
り	い	み	ひ	ち	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	ぬ	る	る	む	ふ	つ	す	く	假定形	語	尾
り	い	み	ひ	ち	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	ね	れ	れ	め	へ	て	せ	け	命令形	語	尾
り	い	み	ひ	ち	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	ね	れ	れ	め	へ	て	せ	け	命令形	語	尾

活用名		活下一段												活用名			
語幹		活用名												語幹			
美	善	(爲)	(來)	植	晴	榮	攻	堪	兼	捨	寄	受	(得)	(蹴)	未然形	語	尾
しく	く	しせ	こ	忍	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	け	連用形	語	尾
しく	い	し	き	忍	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	け	終止形	語	尾
しい	い	する	くる	忍	れる	える	める	へる	ねる	てる	せる	ける	える	ける	連體形	語	尾
しい	い	する	くる	忍	れる	える	める	へる	ねる	てる	せる	ける	える	ける	假定形	語	尾
しけれ	けれ	すれ	くれ	忍	れれ	えれ	めれ	へれ	ねれ	てれ	せれ	けれ	えれ	けれ	命令形	語	尾
		せよ	こい	忍よ	れよ	えよ	めよ	へよ	ねよ	てよ	せよ	けよ	えよ	けよ	命令形	語	尾

二 助動詞の活用表

時		尊敬		使役		可能		受身		種類			
來	未	去	過										
よう	う	た	ます	られる	れる	させる	せる	られる	れる	られる	れる	本形	種類
		たら	ませ	られ	れ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	未然形	種類
		たり	まし	られ	れ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	連用形	種類
よう	う	た	ます	られる	れる	させる	せる	られる	れる	られる	れる	終止形	種類
よう	う	た	ます	られる	れる	させる	せる	られる	れる	られる	れる	連體形	種類
		たら	ますれ	られ	れ	させ	せ	られ	れ	られ	れ	假定形	種類
			ませ			させ	せよ			られ	れよ	命令形	種類
比較		希望		指定		打消		推量		種類			
やう	だ	たい	である	です	だ	まい	ない	ぬ	らしい	よう	う	本形	種類
やう	だ		であら	でせ	だ							未然形	種類
やう	だ	たく	であり	でし	だ		なく	す	らしく	よう	う	連用形	種類
やう	だ	たい	である	です	だ	まい	ない	ぬ	らしい	よう	う	終止形	種類
やう	だ	たい	である	です	だ		ない	ぬ				連體形	種類
		たけれ	であれ				なけれ	ね				假定形	種類
												命令形	種類

昭和二十年十二月十九日
文部省檢定濟
 高等女子學校・國語科用

著作權所有



昭和十二年五月十日 印刷
 昭和十二年五月十五日 發行
 昭和十二年十月十五日 訂正再版印刷
 昭和十二年十月十五日 訂正再版發行

著者 八波則吉

代價 三十七錢
 (初學年用)

發行者 東京市神田區錦町二丁目七番地
 印刷者 東京市神田區錦町二丁目七番地
 印 倂 要 三 郎

發行所

東京市神田區錦町二丁目七番地
 振替東京七九五七七番
 大阪市東區博勞町五丁目
 振替大阪九八二〇番

英進社

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

山形女子高等學校
図書印

山形女子高等學校

一〇

廿二

五二二

國

原

七



広島大学図書

2000024157

